【179】

氏名	小 坂 道 也
授与した学位	博　　士
専攻分野の名称	医　　学
学位授与番号	博乙第３２６０号
学位授与の日付	平成１０年９月３０日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 （学位規則第４条第２項該当）
学位論文題目	IgA 腎症扁摘例の長期予後 －非扁摘例との腎病理所見による比較検討－
論文審査委員	教授　槇野　博史　教授　公文　裕巳　教授　赤木　忠厚

学位論文内容の要旨

IgA 腎症に対する両側口蓋扁桃摘出術（以下扁摘）の長期的な臨床効果を検討する目的で腎生検後５年以上経過を観察することのできたIgA 腎症扁摘例 43 例と、同時期に同施設で内科的治療のみ施行されたIgA 腎症非扁摘例 42 例との予後について臨床病理学的に比較検討した。全症例での寛解率(P<0.01)、腎機能保持率(P<0.05)は、扁摘群の方が非扁摘群よりも有意に高値であった。腎生存率では有意差がなかったものの、扁摘群で腎生存率が高い傾向が認められた（扁摘群 97.7%、非扁摘群 83.3%）。腎病理所見の分類には、平成７年にIgA 腎症診療指針作成合同委員会より出された「IgA 腎症診療指針」の中の予後判定基準の細目－腎生検光顕標本組織所見を用いた。その結果「予後良好群」の寛解率（P<0.05)および「予後比較的不良群」の腎機能保持率(P<0.05)、腎生存率(P<0.05)で扁摘群の方が統計学的に有意に高率であった。扁桃炎の既往の有無では予後に有意差は認めなかった。今回のIgA 腎症扁摘例の長期予後の検討によりIgA 腎症の治療の一つとして扁摘を行うことの臨床的有用性が示された。

論文審査結果の要旨

本研究は IgA 腎症に対する両側口蓋扁桃摘出術（以下扁摘）の長期的な臨床効果を検討する目的で腎生検後５年以上経過を観察することのできた IgA 腎症扁摘例 43 例、同時期に同施設で内科的治療のみ施行された IgA 腎症非扁摘例 42 例との予後について臨床病理学的に比較検討した。全症例での寛解率（P<0.01）、腎機能保持率（P<0.05）は、扁摘群の方が非扁摘群よりも有意に高値であった。腎生存率では有意差がなかったものの、扁摘群で腎生存率が高い傾向が認められた（扁摘群 97.7%, 非扁摘群 83.3%）。IgA 腎症診療指針作成合同委員会より出された「IgA 腎症診療指針」による「予後良好群」の寛解率（P<0.05）および「予後比較的不良群」の腎機能保持率（P<0.05）、腎生存率（P<0.05）で扁摘群の方が統計学的に有意に高率であった。本研究は IgA 腎症の治療の一つとして扁摘を行なうことの臨床的有用性を示したものとして価値ある業績と認める。よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。